

人形浄瑠璃における平家物語受容のあり方を巡って 付・『仏御前扇軍』論

伊 藤 り さ

はじめに

本稿は、浄瑠璃作品の素材とされた平家物語の説話の側から浄瑠璃作品の分析をおこない、浄瑠璃作者が、平家物語をはじめとする軍記から、どの説話を取り上げ、どのように加工したかを考察することにより、浄瑠璃作者による素材選定の様相や作劇法を検討するものである。

本稿における考察の対象としては、平家物語（『源平盛衰記』を含む）と、平家物語を主な素材としている浄瑠璃の作品（いわゆる「源平物」）を取り上げる。平家物語は作品を構成する説話の種類が豊富にその性格が明確で分類しやすく、かつ一つの説話の形が非常に明瞭で切り出しやすいため、本稿でおこなう検討には最適と判断した。

なお、平家物語とほぼ同時代、同素材を扱う軍記物語に「義経記」がある。平家物語と「義経記」は登場人物や話が重なり合う部分もあり、どちらを素材としているかで考察対象を区切ることには問題なしとしないが、本稿では、中心となる話が平家物語によると思われる作品のみを考察の対象とする。その理由は、今回、先に述べた視点からの分析を試みるにあたり、作品を構成する説話ができる限り単純（あまり多くの内容を含みこまないという意味で）かつ作品の文脈における位置づけが明確であり、浄瑠璃においてどのような解釈・加工・脚色が施されているかという点をはつきり読み取ることのできる作品を対象として選択する方が、分析のモデルとしては適当ではないかと考えたためである。

「義経記」は室町時代物語の影響を色濃く受けており、「系譜的には中世後期の御伽草子などの文学的世界につながる側面を見せている」とも言われ（『日本古典文学大辞典』「義経記」の項。執筆は梶原正昭氏）、平家物語とはかなり異なる要素を含みこんでいると考えられる。本稿は、ここで試みるような分析が果たして浄瑠璃作品を論ずる上で有効かどうか瀬踏みをするという意味もあり、今回は論点を単純化するため、対象を平家物語に絞った。

一、素材としての平家物語

周知の如く、平家物語には五十種を超える諸本が存在するが、本稿では、以下に述べる検討の結果、平家物語のテキストとして、原則的に流布本と「源平盛衰記」（以下、「盛衰記」）を用いることとした（以下、本稿で、「」をつけずに平家物語と言った場合、「盛衰記」「源平闘諍録」等、「平家物語」とは呼称されていない諸本も含めた平家物語全般を指す。書名が「平家物語」であることを特記すべき場合は、「」をつけて記すか、「〇〇本」と一本の名称を付す）。

平家物語に限らず、軍書（中世の軍記物語、近世に製作された通俗軍書）の類が近世の庶民に愛読されていたことは間違いないが、これらの平家物語諸本のうち、近世の大坂に在住していた浄瑠璃作者が目にするのができたものはどれであったかを判断することは、ほとんど不可能であろう。しかし、当時の書籍目録・解題を参考に、ある程度の推測をおこなうことはできるのであるのではないかと考え、諸文献に記述が見られる平家物語諸本を抜き出してみたところ、次のような結果となった。

○『群書一覽』（尾崎雅嘉著、享和二年刊）

源平盛衰記 四十八巻／平家物語 十二巻／平家物語長門本 写本 十六巻 或は十二巻／平家物語嵯峨本 十二巻

○『参考源平盛衰記』（水戸彰考館編纂、享保十六年に精撰本完成）の凡例

十一本が掲出される。清水眞澄氏によれば、この十一本は、流布本・現在の鎌倉本・伊藤本・八坂本・現在の康豊本・如白本・佐野本・南都本・南都異本・東寺本・長門本に該当する。

○『新編鎌倉志』（水戸彰考館編纂、奥書より貞享二年成立）の引用書目

源平盛衰記／平家物語／異本平家物語（八坂本・鎌倉本・長門本）

○京都曼殊院の蔵書目録

平家物語 片仮名本 十二策 八巻目闕 一函／源平盛衰記 附目錄一策 四十八巻 廿四策 一函／平家物語 平仮名絵入 十二策

曼殊院は最澄によって比叡山に建立された天台宗の寺院で、文明年中に伏見宮貞常

親王の皇子慈運親王が入寺して門跡寺院となり、明暦二年、現在の寺地に移った。清水氏は『平家物語』の伝本が、こうした貴顕のもとでも流布本と思われる十二巻本と『源平盛衰記』の二種にとどまる事は注目される」と指摘している。

○「今大路家書目録」

平家物語 十二冊 書本／同 二十冊 書本 長府本／源平盛衰記 二十四冊 同 片仮名雑／源平闘諍録 不足五冊 書本 一ノ上下 五八ノ上下斗

福田氏によれば、『今大路家書目録』の「おおよその原型は江戸初期に成立し、江戸中期に現存本の形に整えられたと思われる」とされる。今大路家は徳川のお伽衆を務めた家柄で、室町末期の名医曲直瀬道三の流れを汲み、二代目道三が江戸に招かれて徳川の典業になって以来、今大路家と改めた。福田氏は、今大路家について「医家でありながらも、かかる芸能や文芸とからんでくる文化圏・交流圏の一つの発信地であった」「治癒の謝礼として貴人より書籍が送られるといった事情も考慮されるべきであろう」と指摘している。また、仮名草子や舞の本といった俗書、日常に使用していた医学の実用書などは記載されず、もっぱら稀覯書、家の誉れとなる書ばかりを記しているという。

○「大惣蔵書目録」

平家物語 十二冊（二種。そのうち一種は延宝五年刊の流布本系統）／平家物語 長門本 二十冊／源平盛衰記 二十四冊（二種）

大惣の目録では、長門本が貸本として整備されているのが興味深い。近世の一般の人々は、読み物的な書物（小説や軍書の類）は蔵書とするより貸本屋で借りて読むのがもっぱらであったという指摘もあり、そうした事情を踏まえれば、近世、長門本が庶民の目に触れる機会はあるのほか多かつたのではないだろうか。

以上、瞥見した目録類は、門跡寺院や国学者、お伽衆のような蔵書家の蔵書目録や、水戸徳川家が総力を挙げておこなった書物編纂作業の際に用いられた引用文献であるなど、庶民には手に入れないような文献が多く含まれているであろうことが想像される。また、これらの目録類から確認されることは、これらに共通して確認できるのが「盛衰記」と流布本である、ということくらいである（この他、六つの目録のうち五つに長門本が記載されていることにも注目すべき）。しかし、そうした点を考慮に入れたとしても、人形浄瑠璃の観客たる大衆は、平家物語諸本のうちでも特に流布本や「盛衰記」に何らかの形で接する機会が多かつたと考えられることはできるのではないだろうか。以上の推定は内容的に偏った目録によるものではあるにしろ、少なくとも近世芸能である浄瑠璃を考える場合には、流布本、さらには長門本にも目配りするべきではないか、ということは言えるだろう。

続いて、平家物語の構成について整理しておく。平家物語が説話の集積から成ると

いうことは、夙に指摘されており、現在、平家物語が多く説話から構成されていること、そのことは挿話的なもののみならず、合戦部分など平家物語の本筋をなす部分にまで敷衍して考えてよいということは、大方の認めるところであろう。

平家物語の説話については、すでに多くの研究者によつて論じられているが、本稿では、平家物語を構成する説話の性格を、「あらゆる領域に遍在するメディアであり、世界を認識する方法であり、また、ある言説、事柄、事件に含まれる情報のうちから、説話管理者の価値観に基づいて伝えるべきポイントをつかみ出し、コンパクトな形でまとめた一まとまりの話柄」として捉えている。

重要なことは、説話にはすでににがしかの価値観が含まれているということ、口承にしろ書承にしろ、それほど大きな変更を受けることなくしに伝承されていくためには、ある程度の短さが要求されるということである。重要なポイントのみをつかみ取る説話が長大化するということはありえない。逆に言えば、ある説話を素材として新たな浄瑠璃作品を作っていくとき、説話の含む価値観をどう捉え返していくか、また、非常にコンパクトにまとめた話柄をどう展開させていくのか、そこに浄瑠璃作者の新たな価値観や方法論の入り込む余地がある、ということである。

さて、前述のとおり、平家物語は多くの説話から構成されている。しかし、一概に「説話」といってもその内容にはさまざまなものがあり、すべてを一括りで捉えることは適当でない。本稿では、諸先学の説話分類を参考に、平家物語の説話を、本系説話（主筋を構成する説話）、合戦譚、傍系説話、背景説話の四種類に分類する。

合戦譚は本系説話に属するものであるが、軍記という作品の性格、および謡曲における戦語りなどとの関連も踏まえ、分類を別に立てることにする。また、本系・傍系にかかわりなく、ある個人に関する説話をまとめて捉えることも可能である（例えば、文覚についての説話は本系と傍系のどちらにもまたがっているが、「文覚説話群」として考えることもできる）。背景説話は、平時忠を評して「楊貴妃が幸し時、楊国忠が榮えしが如し」（巻一「清水炎上」）と述べるごとくであるが、あまりに断片的なものが多いため、本稿での検討の対象から外す。本系と傍系のどちらに目をつけるか、説話どうしをどう絡ませていくか、と言うことも、浄瑠璃作者の平家物語受容のあり方や、作劇意図が現れるところであろう。

ただし、平家物語は説話から構成されていると言っても、平家物語は「説話集」ではなく、平家興亡史を大きな見通しの下に述べる「物語」である。平家物語が説話的発想を物語の文脈に位置づける手段の一つとして、「記録的記事」「編年体的な叙述様式」が考えられる。「事柄の内容の具体的な描写」を伴わず、「そうしたできごとが起き、おこなわれたということを目付との対応関係のもとに書きとどめている」だけとされる記事である。しかし、これが純粋な「事実の記録」とは言えず、物語の意図する文

脈にそった意識的操作（日付の改変など）がおこなわれていることはしばしば指摘されるとおりである。つまり、物語の文脈が意図する方向に叙述の道筋をつけるのが記録の記事であり、その道筋に沿って、物語に肉付けをし、展開していくのが説話だと言える。

そうだとすれば、浄瑠璃作者が平家物語を素材として新たな作品を作る場合、いったん物語を説話のレベルにまで読みほどこいて平家物語の文脈から説話を解放し、説話が物語の文脈に沿う形で持っていた価値観や切り口を一度削り取った上で、今度は自分の作品の文脈に沿って、新たに説話を再構成していく必要がある。説話をどのように捉え返し、新たな意味を与えていくか、作品の文脈にどう位置づけていくか、その方法が浄瑠璃作品のありようを規定していくことになる。

また、能や舞曲と異なり、長編化が進んだ浄瑠璃の場合、一つの説話だけで作品を構成することは（できないことではないが）かなり難しいと思われる。だとすれば、いかに説話を組み合わせ、展開していくかという点に、作者ごとの作劇法の特徴が表れることになる。説話が描かない部分を補うという方法もあれば、説話に書かれたことはそのままに、新しい意味を付与するという方法も考えられる。説話の組み合わせを変えることで、別の読み方を展開していく場合もあるだろう。また、先行芸能である能や舞曲等の作品を媒介とする場合も少なくないであろう。その具体的様相について、次節以下で検討をおこなう。

二、近松の源平物

本節では、近松の作品について考察する。検討の対象とした近松の作品は表1に挙げたとおりである。この他にも源平物と隣接する作品が八作ある。それらの作品で平家物語の説話がまったく利用されていないわけではないが、主立った部分が平家物語以外の素材から構成されていると考えたため、除外した。

さて、C1からC10まで挙げた作品のうち、C3とC4、C5とC6はほぼ同内容であり、少なくともC3・C4については竹本座上演作を一部改作して宇治座で上演したものと考えられるので、まとめて扱う。また、C8『津戸三郎』は角太夫座で上演された『門出八島』と密接な関係を有しており、信多純一氏によって、元禄二年五月に竹本座で上演された『津戸三郎』を一部改作したものが『門出八島』であることが考証されている²³⁾。

これらの作品に含まれる平家物語関係説話を切り出して見たものが表2である（巻数・段名は流布本による）。このうち、巻数と段名に（ ）をつけたものは、平家物語に直接該当する説話がないものである（一部分でも重なるものにはつけていない）。また、段名で「〇〇ほか」としたものは、「鬼界が島流人説話」「文覚説話」「藤戸合戦説話」

などとまとめられる説話群である。このほか、⑥⑧、⑦⑨⑩はそれぞれ「忠度説話」「熊谷説話」としてまとめることができる。

もちろん、ここに挙げたものの以外にも、平家物語に登場する人物が現れる局面はある。例えば、『平家女護島』第三「朱雀の御所」は、男らを色仕掛けでたらしこむと見せて、実は源家再興のための兵を集めている常盤と、それを知った弥平兵衛宗清が常盤・牛若らを落とすという場面である。しかし、この「常盤を見逃す宗清」という設定は、すでに『烏帽子折』（元禄三年〔推定〕、竹本座）に見えており、『平家物語』巻十「三日平氏」などより、むしろ「義経記」や舞曲「伏見常葉」などから着想を得ているのではないかと考えられるので、そうしたものは除いてある。

*1は流布本には該当説話がないが、長門本巻二〇か、あるいはそれに拠ったかとされる謡曲「盛久」などから素材を得ていると考えられる。*2は、謡曲「景清」「大仏供養」「舞曲「景清」などにある、平家残党の後日譚を景清一人に集約した内容の先行作品に拠るもので、「景清物」とも言うべき作品を形成する伝承群であるが、平家物語に直接の典拠はない。*3の津戸三郎往生譚の部分は、『法然上人伝記』や『法然上人伝』といった一連の法然上人の伝記に書かれる津戸三郎の事蹟に拠るものであることが、信多氏によって明らかにされている²⁴⁾。

表2を一見してわかるとおり、近松は、C1～6までは平家物語の説話（群）を、組み合わせることなく単独で用いているが、元禄以降の作品では、説話を複数組み合わせさせて作品を構成している。特に、平家物語を素材とする最後の作品『平家女護島』では、鬼界が島流人説話、文覚と頼朝との出会い、の二つの流れに、重衡の南都焼き討ちと清盛あつち死に、常盤・牛若と弥平兵衛宗清などを絡ませており、それ以前の作品に比べ、説話の組み合わせが複雑になっている。いずれにしろ、作品数が十に対して、素材とされた説話が十六という点からも、近松は一つの浄瑠璃作品でそれほど多くの説話を組み合わせる傾向がないと言えよう。

また、これらの説話を、本系・傍系に分類すると、本系に属するものが②⑤⑬⑭、合戦譚に属するものが⑦⑨⑪⑫、傍系に属するものが①⑥⑧⑩、平家物語に直接典拠が見出せないものが⑬⑭となり、本系説話に分類されるものが圧倒的に多い。

以上、十六の説話のうち、⑬⑭は平家物語に見出せない内容なので省略するとして、残る十四の説話の受容のあり方について簡単に見ていきたい。

まず、説話の文脈にそれほど手を加えずに用いていると考えられるものは、②③⑩である。紙幅の都合上すべてを論じることではできないが、いくつか例を挙げる。

②では、「俊寛、成経、康頼の三人が鬼界が島へ遠流になり、俊寛以外の二人は赦免されるが、俊寛は一人島に残される」という説話の骨格には、ほとんど手が加えられていない。また、この説話に海女千鳥、俊寛妻の東屋というキャラクターを絡ませて

表1 検討作品一覧（作品番号は本稿での検討にあたり、便宜的に付与したもの）
近松門左衛門

作品番号	外題	初演年・劇場
C1	出世景清	貞享二年（一六八五） 竹本座二の替り（推定）
C2	佐々木先陣	貞享三年七月（一六八六） 竹本座
C3	薩摩守忠度	貞享三年十月 竹本座
C4	千載集	貞享三年（推定） 宇治座
C5	主馬判官盛久	貞享三年十月以後、貞享四年正月以前（推定） 竹本座
C6	盛久	『主馬判官盛久』の上演以降 宇治座
C7	大原問答（存疑作）	元禄初年（一六八八）頃（推定） 竹本座
C8	津戸三郎	元禄二年五月（一六八九） 竹本座
C9	癡静胎内裙	正徳三年閏五月（一七二三） 竹本座
C10	平家女護島	享保四年八月（一七一九） 竹本座

*検討の対象としたのは『近松全集』（岩波書店刊）第一～十三巻に収録された作品のうち、平家物語中の説話が作品の中心となっていると考えられるもの。初演年月・劇場は『義太夫年表 近世篇』・『近松全集』解題に拠る。

文耕堂

作品番号	外題	初演年・劇場・合作者
B1	仏御前扇軍	享保七年（一七二二）、竹本座、松田和吉、近松門左衛門添削
B2	三浦大助紅梅豹	享保十五年（一七三〇）、竹本座、長谷川千四・文耕堂
B3	須磨都源平躑躅	享保十五年、竹本座、文耕堂・長谷川千四
B4	壇浦兜軍記	享保十七年（一七三二）、竹本座、文耕堂・長谷川千四
B5	御所桜堀川夜討	元文二年（一七三七）、竹本座、文耕堂・三好松洛
B6	ひらかな盛衰記	元文四年（一七三九）、竹本座、文耕堂・三好松洛・浅田可啓・竹田小出雲・千前軒
B7	伊豆院宣源氏鏡	元文六年（一七四一）、竹本座、文耕堂・三好松洛・小川半平・竹田小出雲・千前軒

並木宗輔

作品番号	外題	初演年・劇場・合作者
S1	清和源氏十五段	享保十二年（一七二七）、豊竹座、並木宗輔・安田蛙文
S2	蒲冠者藤戸合戦	享保十五年（一七三〇）、豊竹座、並木宗輔・安田蛙文
S3	待賢門夜軍	享保十七年（一七三三）、豊竹座、並木宗輔・安田蛙文
S4	那須与市西海硯	享保十九年（一七三四）、豊竹座、並木宗輔・並木丈助
S5	石橋山鏡襲	寛保二年（一七四二）、江戸肥前座、為永太郎兵衛・並木宗輔

その他の作者

作品番号	外題	初演年・劇場・合作者
T1	頼政追善芝	享保九年（一七二四）、豊竹座、西沢一風・田中千柳
T2	大仏殿万代石楚	享保十年（一七二五）、豊竹座、西沢一風・田中千柳
T3	伊勢平氏年々鑑	享保十一年（一七二六）、竹本座、竹田出雲
T4	加賀国篠原合戦	享保十三年（一七二八）、竹本座、竹田出雲・長谷川千四
T5	太政入道兵庫岬	元文二年（一七三七）、竹本座、竹田小出雲・竹田正蔵

表2 利用説話一覧

近松門左衛門

巻数・段名	作品での扱い	作品番号
1 (一 妓王)	出家後の妓王妓女の庵室	C9
2 二(三 足摺ほか	鬼界が島への流人と赦免、俊寛一人が島に残る	C10
3 五 文覚荒行ほか	文覚は義朝のどくろを奪い返し、蛭が小島へ向かう	C10
4 五 奈良炎上	重衡、南都焼き討ち後凱旋	C10
5 六 入道逝去	清盛、東屋・千鳥の祟りによりあつち死に	C10
6 七 忠度都落	忠度は俊成に歌集を託すため、都落ちの途中から引き返す	C3
7 九 一二の懸	熊谷直実、子息小次郎とともに先陣を果たす	C7
8 九 忠度最後	忠度、岡部六弥太に討たれ、籠の短冊により身許が知れる	C3
9 九 敦盛最後	敦盛、熊谷次郎直実に討たれる	C7
10 (九 敦盛最後)	熊谷、出家して蓮生と名乗り、黒谷法然坊の弟子となる	C7

17	盛三十七	作品での扱い	作品番号
16	盛三十五	梅が枝が無間の鐘に見立てて手水鉢を打つと、奥の客（実は源太母延寿）が三百両をふらせる。源太は、その金で請け出した産衣の鎧の籠に紅梅を挿して出陣	B 6
15	盛三十五	宇治川の先陣争いで敗れた梶原源太景季は母から勘当を受けるが、先陣を譲ったのは佐々木四郎が父を庇ってくれた恩義に報いるためと明かす	B 6
14	盛三十五	義経は入京に際し里人に道を尋ね、好地名に喜ぶ	B 6
13	盛三十三	尾形惟秀の息子、二郎惟光・三郎惟義はそれぞれ平家・源家に仕官を定めるが、父から、二郎は平家に討たれた菊地二郎太夫の息子と明かされ、二人で後白河院の守護に向かう	B 3
12	七 忠度都落	狐川から俊成館に引き返した忠度は阿根輪平次に切りかかられるが、六弥太の機転で俊成館の門内に入る	B 3
11	六 小督	小督は宗盛に横恋慕されるが信連に危ういところを救われ、法輪寺辺にいる妓王・妓女・母とち・仏御前の元に隠れる。思い焦がれた天皇は仲国とともに探し尋ねる	B 1
10	盛二十二	頼朝一行が敗走中に、八丁礮喜平次の後家に烏帽子を誂えさせたところ、頼朝だけ左折だったので吉事と喜ぶ	B 2
9	盛二十一・二十二	三浦大助義明、嫁らとともに衣笠城に立てこもり、応戦	B 2
8	盛二十	石橋山合戦での与市の討死を、乳人文蔵がお土に語る	B 2
7	盛十九	頼朝は藤九郎盛長を供に文覚を訪れる。文覚は入定と偽り院宣をいただく謀をこらし、義朝のどくろを頼朝に見せる	B 7
6	盛十八	伊東入道祐親は八牧判官兼高と組んで頼朝を討とうとするが、金吾が身替りとなる。乙女の前は身替りになりそこねる	B 7
5	（盛十六）	猪早太、丁七唱ら頼朝の家来は、讃岐と若宮を守護する	B 7
4	盛十三	丁七唱が宮執心の笛小枝を三井寺に取りに戻る間に宮が討たれる。宮を裏切った乳母子宗信は宮の愛人讃岐に横恋慕する	B 7
3	（四 橋合戦）	橋合戦で先陣を果たした田原又太郎忠綱は、狂気を装い高倉の宮の若宮の命を救う	B 7
2	（四 信連合戦ほか）	以仁王の乱後、生き残った長谷部信連は清盛を敵と狙うが、景清に阻まれる	B 1
1	一 妓王	清盛は妓王を寵愛するが、渋谷土佐次郎正俊の妻延寿がやつした仏御前に寵を奪われる。妹の妓女は、清盛を敵と狙う長谷部信連と通じている	B 1
16	* 3	津戸三郎は佐藤兄弟を義経に推挙する。次信追善結願の日、法然の示す奇瑞に一念発起し、割腹して壮絶な往生を遂げる	C 8
15	* 2	景清は頼朝を討つべくうかがうものの果たせず生け捕られるが、観音の利生により助命され、日向宮崎庄を与えられる	C 1
14	* 1	主馬判官盛久は源氏に生け捕られるが、観音の利生により助命される	C 5
13	十二 土佐房被斬	頼朝から義経追討に遣わされた土佐房は、逆に義経に討たれる	C 9
12	十一 嗣信最後	屋島合戦の折、次信は義経の身替りとなって射落とされる	C 8
11	十 藤戸ほか	佐々木盛綱は、浅瀬を教えた浦人を殺し、見事先陣を果たす	C 2

並木宗輔

巻数・段名	作品での扱い	作品番号
1 三 金渡	藤太夫とおぐまの軍司は重盛が唐土育王山へ祠堂金三千両を渡すとき千両を盗んだ。その償いのため、源氏方の盛綱に偽の浅瀬を教えたと言い、六代助命のため盛綱に正しい浅瀬を教えて死ぬ	S 2
2 盛十六	臼井庄司広匡の娘あやめは秘伝の巻物と雷上動の弓矢を持参して頼政と夫婦の約束をするが、近衛院の内侍として召し連れられる	S 3
3 四 鶴	近衛院が病になり、頼政主従は化け物を雷上動の弓矢で射落とす。褒美として院は頼政にあやめと名剣獅子王を下賜する	S 3
4 盛二十	石橋山の合戦で与市と俣野が組み合うところへ俣野妻小団巻がかけつけ、声を頼りに与市を刺すが、実は与市の父岡崎四郎で、呉服と今若を助けてもらった札に自分が与市として討たれ、俣野の名を揚げようとしたと語る	S 5
5 (盛三十八)	敦盛の家来伊賀平内左衛門光起・娘二見は偶然出会った宗清とともに義経陣所に忍び込むが、平内左衛門は討死、宗清は義経の配慮で助けられた二見を連れ都に向かう	S 4
6 十 千手	千寿(長田庄司忠宗の娘)は今若(義朝遺児)の身替りとして、自分と重衡との間に生まれた重松の首を差し出す	S 5
7 (十 三日平氏)	宗清は建礼門院を連れて逃げる	S 4
8 (十 維盛出家ほか)	斎藤五は盛綱を味方につけるため説得するが失敗。梶原の家来が六代を狙うが、斎藤五の妻唐綾が身替りとなる	S 2
9 十 藤戸	盛綱は嘘の浅瀬を教えた藤太夫(伊賀平内左衛門)を殺害し、先陣を果たす。その後、文覚とともに藤太夫の回向をおこなう	S 2
10 十一 那須与一	那須与一は息子二人を八島軍に伴うが、二人は生け捕られる。二人を助けた宗清は、扇の的を射た矢の方向を手がかりに二人を与一のもとに返し、自害する	S 4

18 九 忠度最後	簾に短冊を挿して一谷合戦に向かい、六弥太と組討ちになった忠度はわざと討たれようとするが、裡菊が追いつき、忠度の右腕をむね打ちする	B 3
19 (九 重衡虜)	生け捕られた重衡は義経と対面。重衡を裏切った乳母子後藤兵衛盛広は逃亡するが捕らえられて成敗される	B 3
20 九 敦盛最後	敦盛は扇屋若狭のもとに扇折小萩として匿われている。客として訪れた熊谷次郎直実はそれと知って見逃し、若狭の娘桂子が敦盛の身替りとなる	B 3
21 (盛四十)	名剣小鳥を義経に渡そうと出立した渋谷庄司胤俊は、田上宿で転寝の際に平家方の有国に小鳥を奪い取られた上、殺害される	B 1
22 盛四十一	松右衛門(実は樋口)は逆櫓をてこに梶原に取り入るが、すでに梶原はそのことに気づいており、樋口は重忠に生け捕られる	B 6
23 (十一 弓流)	景清と鍛引きで争った箕尾谷はその後景清をつけ狙うが、実は景清と兄弟だということが兜の鍛から知れ、ともに鎌倉に向かう	B 4
24 十一 平大納言文沙汰	義経は頼朝から渡すよう命ぜられていた平家の連判状を焼き捨てる	B 5
25 (十二 土佐房被斬)	渋谷土佐二郎正俊(元・義朝重金王丸)は重盛を父庄司胤俊の敵と思い、重盛を討つため妻の延寿を仏御前とやつして送り込むが、実際の敵は延寿の父有国とわかる。有国の首を打った土佐二郎は出家し、土佐房正俊と名乗る	B 1
26 盛四十六	土佐房昌俊は梶原の讒言から義経を守るため、梶原とともに義経の討手に向かう。十三年前に義経千人斬りで殺されたと思っていた伊勢三郎の父は、実は土佐房が誤って殺害したことがわかるが、土佐房は義経を救うため、伊勢に猶予を乞う。堀川に夜討をかけたのは、土佐房昌俊ならぬ正尊に化けた番場忠太	B 5
27 * 1	大場・俣野兄弟は鎌倉絃掛観音に参詣。六郎大夫の刀を所望し、来合わせた梶原に目利きを依頼する	B 2
28 * 2	清盛を狙う信連を景清が繰り返し阻む	B 1
29 * 3	熱田大宮司のもとに匿われていた景清は愛人阿古屋とその兄十歳の助けを得て頼朝を狙うが果たせず、両眼をくりぬき頼朝のもとに下る	B 4

11	十一 平大納言文沙汰	義経は卿の君と縁組し、天皇が時忠に与えた諭旨を取り上げる	S 1
12	十二 土佐坊被斬	義経は頼朝が朝敵にならぬよう自分が悪人になったと語り、正俊の首をひき抜くことで都を開く理由として、奥州へ落ちる	S 1
13	(十二 六代助命)	文覚は六代助命のため範頼のもとを訪れ、範頼のはからいで六代は助かる	S 2

その他の作者

	巻数・段名	作品での扱い	作品番号
1	(四 源氏揃ほか)	高倉の宮は内侍所を盗み皇位を狙う。頼政は宮を平家に討たせ、国家の安泰を図る所存と競らに告げる	T 1
2	四 競	自分らの手に負えぬ荒馬を早太がやすやすと桜につなぐので無念の宗盛は、馬の額に仲綱と焼き付ける。早太は仕返しに宗盛の馬にむねもりと焼き付ける	T 1
3	(四 橋合戦)	田原又左衛門は娘唐国を頼政息仲綱と娶わせる。頼政は嫁引出として木下を又太郎に与え、先陣せよと教えて別れる	T 1
4	四 宮御最後	又左衛門は自らの首を婿仲綱に与える。競・唱は刺し違え、仲綱も自害する	T 1
5	盛二十六	義仲は齋藤実盛によって木曾に送られ、兼遠に預けられて成人する	T 4
6	六 経島	清盛は築島を造営する	T 5
7	盛二十六	清盛は自分が白川院の落胤と知り、大悪心を起こす	T 3
8	盛三十ほか	実盛は髪を黒く染め錦の直垂を拝領して戦に臨み、手塚に討たれる。兼平は実盛助けたさに実盛を名乗って戦場を駆け回るが、相手にされない	T 4
9	盛三十五	義仲は、兼遠娘の巴（もと近江のお兼）・実盛娘の山吹（もと寿）と夫婦となる	T 4
10	十三日平氏	平治の乱後捕らえられた頼朝は、弥平兵衛宗清のもとに預けられる	T 3
11	(十一 弓流)	水保屋は大仏供養までに景清を捜し出すことを願い、許される	T 2
12	盛四十三	清盛が男子を欲しがったのが生まれたのは女子だったため、清水坂の傘屋の子と取り替えた。それが宗盛である	T 1
13	十一 能登殿最後	安芸太郎兄弟は父の安芸前司照任の敵として教経に組み付き、ともに海中に没する	T 5
14	* 1	景清は頼朝を狙うが改心して眼をくりぬき日向に赴く。尋ねてきた娘糸竹と再会し、一旦は娘だけを帰して自分は日向に留まるものの、結局隠し目付に伴われて自分も都へ上る	T 2

『清盛悪逆・女人哀話型説話』のモチーフを取り入れることで、清盛の横暴を際立たせており、もともと鬼界が島流人説話の置かれていた文脈からも外れていないと考えられる。説話の文脈ということから言えば、この作品では、それを変える手続きはおこなわれていない。しかし、近松は、俊寛が島に一人残される理由を、俊寛自身が葛藤の末に選択した行為であるとした。それにより、鬼界が島流人説話自体の骨格は生かされたまま、俊寛が主人公のドラマとして再構築されたと言える。

⑤は、清盛の凄絶な死に様を、清盛に殺された二人の女性の亡霊によるものとする。清盛の死は、「すは仕つるは、さ見つる事よ」と京中で囁かれ、二位殿（盛衰記）では内の女房の夢に閻魔王宮からの迎えが現れるなど、清盛の死に様は日ごろの悪逆の報いだと誰もが考えていたであろうことが、すでに平家物語に書かれている。『平家女護島』では、その悪逆が東屋・千鳥の死という形で現れており、彼女たちの亡霊が清盛を苦しめ、最終的に死に追いやるといえるのは、平家物語における「清盛の死」の背後にあるものを、作品の中で完結する形で示したものとと言える。

⑦⑨⑩の熊谷説話については、周知の熊谷発心説話に舞曲「敦盛」、古浄瑠璃「こあつもり」熊谷先陣問答などのモチーフを取り合わせたものと考えられる。『大原問答』自体は、出家後の蓮生に焦点が当てられており、熊谷発心説話は第一で用いられるに過ぎない。しかし、そのためにかえって、「あはれ、弓矢取る身程口惜しかりける事はなし」「其よりしてこそ、熊谷が発心の心は出きにけれ」（流布本）という思いを熊谷に抱かせる敦盛との合戦譚は、熊谷出家の因縁を明らかにするために欠かせないものであることがはつきりする。こうしたことを踏まえれば、出家後の蓮生に焦点を当てる作品においてもこの説話が必要であり、それは文脈の変容を意味するものではないと言える。

一方、何らかの説話の読み替え、文脈の変更がなされているとみなしえるのは、①②③④の四例である。

例えば、①は、謡曲『藤戸』を踏まえ、母を妻と娘に変えている。『藤戸』『佐々木先陣』ともに、主眼は盛綱より盛綱に殺害された浦人とその家族にあるが、「盛衰記」では浦人を殺す記述は見られず、浦人の殺害は（少なくとも「盛衰記」作者にとって）説話の眼目ではない。『藤戸』の作者のみならず現在の我々も、盛綱よりは咎なくして不当に殺された浦人とその家族の方に関心がいくのだが、古代・中世武士の感覚からすると、この説話の眼目たるべきは殺された庶民ではなく、「馬にうみをわたす事。かんか本朝ためしなきとぞ。源平共にかんじ」た（盛衰記）第四十一「盛綱の先陣の見事さにあるのだろう。そういった意味では、能を媒介にしているにしろ、近松はこの説話の眼目を、中世武士の視点から近世庶民の感覚に添って読み替えていると言える。

また、④は、前述のとおり、長門本巻二〇「主馬八郎左衛門尉盛久事」や謡曲『盛久』

などから素材を得ている。しかし、長門本にある清水観音靈験譚の様相、謡曲に見られるような「一人の凡人が仏教的な教養にすがって得た落着き、しかもその中に浮き沈みする小さな不安」や観音の利生に対する感嘆は、『主馬判官盛久』では大きく扱われず、むしろ盛久、常夜の前と堀弥太郎、土屋三郎との間にあるような、敵対する人間関係における「情」の存在や、堀・土屋と小山太郎武者宗重に象徴される善悪の対立構図が強調されている。靈験説話を必ずしも中世的と断ずることはできないが、中世的な色合いが強いことは確かである。『主馬判官盛久』は、観音靈験譚を主要モチーフとして持ちながら、それ以上に情・恩・義理といった人間同士の関係を前面に押し出しているという点で、長門本の盛久説話を近世的に捉え直したと言えるのではないだろうか。

以上、近松作品中に見られる説話の具体例について、非常に大まかな整理をおこなった。メインモチーフとなっている説話に大きな読み替えが加えられているのは①②④の三例であり、全体から見ればごくわずかと云ってよい。もちろん、物語中の説話の文脈を強調するため、あるいは関連性を強化するために新たな登場人物を加えたり、事件が起こった日時を変更したりという操作はおこなっているが、近松の場合、説話の骨格や構成にはそれほど手を加えず、説話と物語の文脈を生かす形で利用することが多いと考えられよう。

三、享保七年～寛保二年の源平物

次に、享保七年から寛保二年の間に初演された源平物を、表1に挙げる（作者ごと。角書は省略）。宗輔の作品として挙げたものは、すべて宗輔が立作者と見なし得るが、文耕堂の作品として挙げたもののうち、『三浦大助紅梅袴』の立作者は長谷川千四である。なお、立作者の所掌について、本稿では内山美樹子氏の見解（三段目切「合作の状況に応じ、三段目切と深く関わる端場、序切、二段目切、四段目切なども執筆」を執筆する、全体の構想・構成について責任を持つ、場合によっては自身の担当以外の部分にも発言「または加筆」する権限を有する）に従うが、合作における執筆者分担の問題には、最小限しか踏み込まない。

この二十一年間、竹豊両座ではほぼ毎年のように平家物語に取材した作品が上演されており、再演も含めれば、さらに上演頻度は高くなる。この時代、源平物の人気は非常に高かったと考えられよう。

なお、文耕堂の『鬼一法眼三略巻』、宗輔の『奥州秀衡有警塚』、竹田出雲らの『右大将鎌倉実記』の三作は義経記物と見なして、本稿の検討対象からは除外した。ただし、検討対象とした作品の中にも、『御所桜堀川夜討』『清和源氏十五段』『待賢門夜軍』など純粋な源平物とはいえないものもあり、採否の判断に恣意的な要素がまったくない

とは断言できないが、作品内容における平家物語の説話の比重等を勘案し、個々の作品に則して判断をおこなったつもりである（特に、「土佐房被斬」は義経都落ちの一因として平家物語の中でも重要な意味を持つており、この説話を扱っている作品は基本的に取り上げた）。

続いて、近松作品と同様、以上の作品に含まれる平家物語関係説話を表2に挙げる。この中にも、文耕堂②⑤（以下、「B〇」と表記）のように、説話群と見なせるものが多い。文耕堂で言えば、B②⑤は宇治合戦説話、B⑧⑨は石橋山合戦説話、B⑫⑬は忠度説話、となる。同様に、宗輔（S〇）のS②③は頼政説話、その他の作者（T〇）では、T①④は宇治合戦説話、T⑥⑦は清盛説話、T⑤⑨は木曾義仲説話、となる。

文耕堂の作品数が七、宗輔・その他の作者がそれぞれ五つで、平家物語を扱った作品数にそれほど違いはないが、素材となった説話の数が、文耕堂二十八、宗輔十三、その他の作者十四と、文耕堂が突出して多い。近松は作品数が十で説話数が十六であることと比較すれば、他の作者の作品も、作品数に対する説話の数が多くなっており、享保寛保期の作品では、文耕堂を筆頭に、より多くの説話を組み合わせた複雑な内容になっていると、まずは単純に考えられよう。組み合わせられた説話が少ない作品もあるが、『御所桜堀川夜討』『清和源氏十五段』などは、平家物語以外から義経千人斬りや伊勢三郎山賊伝承、義経都落ちといった「義経記」の説話を素材としており、単独で用いられているわけではない。

次に、利用された説話の本系・傍系を表にしてみると、次のようになる。

	本系	合戦譚	傍系	その他
文耕堂	八	十一	七	三
宗輔	六	四	三	(ナシ)
その他	一	七	五	一

近松の場合、本系六、合戦譚四、傍系四、その他二であるのと比較すると、文耕堂の作品では合戦譚を素材とするものが多く、傍系説話も、数としては本系に比べさして多くはないものの、作品によつては大きく扱われることが増えている。また、「その他の作者」とした五作のうち、竹本座初演の『伊勢平氏年々鑑』『太政入道兵庫岬』はほとんど平家物語中の説話には拠つておらず、『加賀国篠原合戦』は主に篠原合戦を題材とする。豊竹座初演の二作は、一作が景清物で、残る一作は宇治川の合戦を扱っており、平家物語に直接該当する説話が見えない三作の外は、どちらも合戦譚を主たる素材としている。以上のように、宗輔以外の作品はいずれも合戦譚の比重が高くなっているが、宗輔の場合は特にそうした傾向は見られない。

では、実際の作品の中で、説話は具体的にはどのような扱いされているのだろうか。続けて、各作者が平家物語をどのように受容しているか、全体的な傾向を見ていく。

（一）文耕堂

まず、文耕堂の作品として挙げた七作のうち、B2『三浦大助紅梅豹』の立作者は長谷川千四のため、文耕堂の分析をおこなうについては、『三浦大助紅梅豹』を他の作品と同列に扱うことはせず、参考程度にとどめる。ただし、文耕堂の作品の多くは、千四が享保十七年ごろに大和太夫・文三郎らと独立を企てるまで千四との合作がほとんどであり、『三浦大助紅梅豹』自体についても、「その他の作者」ではなく文耕堂の作品の一つとみなした。

文耕堂の平家物語説話受容の特色として挙げられるのは、すでに触れたとおり、一つの作品の中で素材として組み合わせられる説話が多い、ということである。平家物語を素材とする説話を切り出しただけでも、各作品に四つから五つの説話が組み合わせられている（例外として『御所桜堀川夜討』『壇浦兜軍記』があるが、『御所桜堀川夜討』は「義経記」の説話を利用しているし、『壇浦兜軍記』は近松の『出世景清』を改作した景清物であるから、他の作品とは多少その性格が異なる）。さらに、その組み合わせにおいては、平家物語の中ではまったく関連を有しない説話を持つてくることも多く、ある一点を媒介として二つの説話をうまく結びつけている作品もあるが、それとは逆に、作中で用いられている複数の説話を同一作品中で組み合わせる必然性が最後まで明確でなく、一つの作品の中で相互に関連のない二つの筋が進行している印象を与える作品もある（『須磨都源平躰躰』など）。

また、複数の説話を組み合わせる作品を構成するために、個々の説話は平家物語の文脈からは切り離され、作品の文脈に沿う形で再構築されている。例えば、『須磨都源平躰躰』初段で、狐川から俊成館に引き返してきた忠度は、六弥太の情けで俊成との対面が叶い、「師弟の対面敷島の道に寄る身の望み。晴行く空も明近し」と和歌の望みを述べてはいるが、ここではむしろ六弥太・裡菊との関係を描くことに焦点があり、この場面からは、和歌への執着やみがたく、都落ちという切羽詰まった状況にもかかわらず、和歌のためだけにわざわざ都に引き返してきた歌人忠度の姿は読み取りにくい。この他の作品でも、平家物語の説話を捉え直して新たな意味を与える、というよりは、平家物語にかかれていない部分をふくらませて、別の物語を展開していくという傾向が強い。文耕堂が『源平盛衰記』（傍系説話を過剰なまでに盛り込んでおり、ネタバレとしては利用価値が高いが、文学としての完成度は低い）に拠ることが多いのも、彼が、平家物語を作品の素材集として捉える傾向が強かったことを示しているだろう。

文耕堂作品に用いられている趣向の特色などは、すでに諸先学によって論じられているが、説話という面から見ると、前述のように、関連性のない説話を組み合わせることで、意表をついた人物や局面の結びつきを狙い、説話の周囲をふくらませながら物語を展開させる手法を取っていると言える。

例えば、『ひらかな盛衰記』の樋口次郎兼光は、自分が河内に向かっている間に主君が討たれたことを知り、一旦「我君の御さいこの鬱憤すぐにかけ入。一軍」とは思いながらも、現在は、何とか自分の忠心を証明するために、摂州福島船頭権四郎の家に入婿して時節をうかがっている、という設定である。しかし、この設定は明らかに平家物語の枠から逸脱し、独自の物語を構成している。平家物語の樋口は、最後に都へ上って討死しようとは言うものの、主の仇を討とう、あるいは義仲に対する自分の忠誠を見せよう、とする積極的な行動はない。彼は義仲討死の直後に投降し、その後、元暦元年正月二十五日〔盛衰記〕では二十七日に、五条西朱雀で斬首されているのである。

一方、『ひらかな盛衰記』三段目は「義仲が討死したとき、樋口は十郎藏人行家追討のため河内へ行って別行動だった」という説話の一部分をふくらませて、「だから義仲討死の後もしき延びることはできたかもしれない」という視点から新たな物語を編み出している。『ひらかな盛衰記』の樋口は、「取られし此腕もぎ離は安けれど……ともかくもはからはれよと弓手の腕を押廻せば」と、平家物語で運命に翻弄され、本意ならず縄をかけられたのとは対照的に、自ら進んで縄にかかるが、これも、平家物語の樋口が河内から戻って義仲最期の報を聞いて以降、ほとんどまったくその意思が見えてこない、あるいは意思が生き方に反映されてこないのに対して、『ひらかな盛衰記』三段目では、彼は一貫して自分の意思に従って行動していると言えよう。つまり、『ひらかな盛衰記』三段目において、文耕堂は平家物語からある程度距離を置くことで、樋口に「自らの意思に従って行動を選択する生き方」をさせる新たな物語を作り出しているのである。

また、『御所桜堀川夜討』では、土佐坊の名に「昌俊」「正尊」の二種の伝承があるのを利用し、「昌俊」は頼朝と義経の和解を目指す忠臣で、義経に夜討をかけたのは「正尊」こと番場忠太であったという設定にしており、そこに独自性は見られるのだが、それは登場人物がみずからの意志と決断で選り取った行動ではなく、結局は「昌俊」が名をかつて殺さる、は儚く損。其損を名に取て。正尊と付てこます」と、合作者三好松洛好みの地口に収斂してしまう。

このように、文耕堂の作品全体の傾向として見る限りでは、登場人物や説話（局面）の結びつきや展開に意外性を感じさせることはあっても、それはあくまで個々の説話を持つていた文脈に対する意外性であり、平家物語という「歴史」そのものを大きく

捉え返すダイナミックな構想はさして顕著ではないと言える。⁴³しかしながら、これだけ多くの説話を、大した破綻もなく結びつけて作品をまとめ上げる構想力や、説話をふくらませて新たな物語を編み出していくストーリーテリングの上手さは、評価されてよいだろう。

（二）並木宗輔

並木宗輔は、享保十一年から宝暦元年まで、二十六年間に及ぶ作者生活（寛保二年から二年間、歌舞伎作者に転じる）の中で八作の源平物語を著している（義経記物とみなした『義経千本桜』『奥州秀衡有警増』を含めると十作）。このうち、本稿で考察対象とした時期は、彼のいわゆる「第一次豊竹座時代」に当たり、この時期に八作のうち五作が執筆されている（先の二作を入れれば十作中六作）。彼の作風が歌舞伎役者に転じていた二年間を挟んで大きく変わることは夙に論じられているところだが、説話の面からこの時期の宗輔の作品を見てみると、どのようなことが言えるであろうか。

まず、第一次豊竹座時代の彼の作風に関して、越前少掾の美声を生かした華やかな芸風にあわせ、「男性中心の論理によって疎外され傷付けられる女性主人公」を設定し、女方形の目せ場を際立たせる設定を取る、という指摘があり、平家物語を素材とした作品で言えば、『蒲冠者藤戸合戦』のしがらみ、『那須与市西海硯』の水谷・みたらし等にそうした設定が見られる。

しかしながら、ここでひとつ興味深いことに、この時期の宗輔の作品では女主人公に焦点を当てることが多いにもかかわらず、平家物語の、女性が重要な役割を果たす説話をそれほど扱っていないのである。作品の性格上、平家物語そのものに女性が主役となるような説話（特に本系説話）は少ないのだが、宗輔の作品では「盛衰記」の「菖蒲前事」、「千手」が取り上げられる程度である。文耕堂が『仏御前扇軍』で扱っている「小督」は男社会の身勝手に翻弄されているだけだから（この当時の女性の生き方としては普通だったとも言える）、これはむしろ、彼女の苦境を救う立役の側に焦点を当てる竹本座の作品にこそあさわしいだろうが、妓王や巴、小宰相のように、限られた選択肢の中とは言え、自分の人生に立ち向かっていった女性が、平家物語の中にいないわけではないのである。しかし、宗輔はそうした女性たちの中から素材を取ることにはしていない。文耕堂が「妓王」「小督」や「盛衰記」の「巴関東下事」などを主要モチーフとして利用しているのとは対照的であるが、要するに宗輔は、そうした、女性がクロージアップされるような説話には、大して創作意欲をそそられなかったということになる。それは何故だろうか。

ここでいったん、平家物語の中の女性像に眼を転じたい。平家物語に描かれる女性に対して、永井路子氏は「彼女たち（平家一門の妻たち——引用者注）は、自分の意

志とはほとんど無関係のままに、悲惨さの中に投げこまれた。平家の男たちの生涯の悲劇は、彼らを選びとった悲劇である。(中略)が、妻たちは違ふ。彼女たちは夫の選んだ道を押つけられ、その中で傷つき、苦しんで死ぬか、あるいは死より怖ろしい生を生きなければならなかった」と述べているが、ここには、内山美樹子氏の「並木宗輔の作では、女性には可憐な娘も、誠実な妻も、残酷な状況に引き裂かれるが、男性が女性と同じような、身動きのとれぬ立場に追い込まれる場合は、彼自身の何らかの罪が作用している例が多い」という指摘と一脈通ずるところがあるように感じられる。

また、田中貴子氏は、平家の妻たちは、自らの選択ではなく、夫の都合によって強いられた不本意な人生を送らねばならなかった犠牲者であるとした上で、『平家物語』は、その意味で「男の物語」だけではなく、「女の物語」ともいべき側面を持っているといつてよいだろう」と指摘する。宗輔は、この「女の物語」という影の部分に着目したとも言えよう。

しかし、こうした指摘の一方で、平家物語の女性の描き方について「描写が類型的で、下手」「挿話の性格の強い」ないし「見事な女性往生談に昇華」等の見解も少なくない。こうした指摘を総合すると、平家物語の女人説話は、源平争乱という極限的な状況の中で、人の都合で押しつけられた不本意かつ悲惨な人生を送らねばならなかった女性たちを描いてはいるものの、彼女たちの生々しい現実をそのまま描写するのではなく、一度「類型化」というフィルターを通した上で「女人往生談」という形式に当てはめ、さらに挿話的な位置づけしか与えなかった、と言えようか。現代の読者が、いかに平家物語に「女の物語」の側面を読み取ったにしろ、物語作者には「男の物語」と同等の重みを「女の物語」に与えようとする構想は持たなかったであろう。

平家物語の中で女人説話の占める位置がこのようなものでしかないとすれば、女性を描くこと、殊に「男性中心の論理によって疎外され傷付けられる女性主人公」を描くことに主眼を置いた浄瑠璃作者が、真摯な態度で平家物語から素材を得ようとすればするほど、平家物語の描く「女の物語」に飽き足りなくなってくるのは当然であろう。この時期の宗輔の作品は、『平家物語の説話』という素材の面から見ればかなり創作的な部分が多いが、そうすることで逆に、平家物語が「類型」や「往生談」の形式でしか描かなかつた——端的に言えば、現実をリアルな形で描くことを欲しなかつた——、源平争乱に巻き込まれた女性たちの生の現実を、説話という素材の形ではなく、もつと内面的・本質的なところでつかみ出し、より先鋭化した形で描くことを試みたのだと言えるのではないか。

このことは、作品の題名からもうかがえよう。宗輔は、この時期の源平物語のうち『清和源氏十五段』以外の四作品において、合戦の名称、ないし特定の合戦譚を連想させる単語を題名に用いている。言うまでもなく合戦は戦闘従事者たる男性中心の場面で、

合戦の場に女性が登場することは稀である。女主人公の置かれた残酷な状況を徹底的に描写し、越前少掾の美声の聴かせどころと女方人形の見せ場を強調するにもかかわらず、彼は、軍記の中でもとりわけ男性中心とみなし得る合戦場面を外題に据える。それは、源平争乱の時代、合戦に象徴されるような男性中心の社会であることを前提とした上で、『蒲冠者藤戸合戦』のしがらみ、『那須与市西海観』の水合や『石橋山鎧襲』の裡葉が、戦闘には直接関与しないものの、戦の駆け引きに巻き込まれた結果、誤解と失望の中で自害するところまで追い込まれたように、その中で不本意な生き方を押しつけられる女性を描くということ強調するためではなからうか。

以上、享保十二年から寛保二年にかけての宗輔の作品について、「女性の描き方」を中心に、平家物語の説話の扱い方を検討した。この時期の宗輔は、平家物語が明確な形では描かなかつた「女の物語」の部分に鋭く抉り出すことを試みた結果、平家物語に素材をとつてはいるが、説話そのものからは大きく逸脱している。しかし、そのことによってむしろ、説話を素材として利用するという以上に、平家物語の向こうに透けて見える、源平争乱期における「生の現実」に迫ろうとする態度を読み取れるように思う。

(三) その他の作者

このグループは、竹本座で初演された作品(『伊勢平氏年々鑑』『加賀国篠原合戦』『太政入道兵庫岬』)と豊竹座で初演された作品(『頼政追善芝』『大仏殿万代石楚』)とに分けられるが、このうち『伊勢平氏年々鑑』『太政入道兵庫岬』『大仏殿万代石楚』は先述のとおり平家物語に直接の典拠説話が見出しにくい⁽³⁶⁾ため、残る『加賀国篠原合戦』と『頼政追善芝』を取り上げる。

まず享保九年に豊竹座で初演された『頼政追善芝』について考えてみたい。この作品は謡曲『頼政』をもとに作られた宇治加賀所属の正本『源三位頼政』の改作である。『源三位頼政』が頼政死後のできごとを中心に描くのに対し、この作品では、高倉の宮が謀叛を企てることから頼政の敗死までの部分の比重が大きくなっている。『頼政追善芝』は、高倉の宮の乱にかかわる主な説話のうち「競」「橋合戦」「宮御最後」を利用しており、さらに「鶴」で「懇切つたる郎等」とされる猪早太も登場するなど、平家物語の説話を比較的そのままの形で利用する部分が多いとは言えるが、説話の文脈や登場人物の行動の意味は、平家物語とはかなり変わっている。特に、高倉の宮の行動は、平家物語のみならず、この合戦を素材とした他作品とも大きく異なる。

平家物語では、高倉の宮を、三十歳過ぎまでうつつと過ごしていたところへ頼政から拳兵を唆され、煩悶の末「可然天照太神の御告やらん」と拳兵したもの、最後には運にも乳母子にも見放されて敗死する、不遇の皇子として描いている。また、頼

政に担ぎ出されて謀叛を起こしたとは言え、高倉の宮自身、何を目的として挙兵したのかがいまひとつはつきりせず、結局のところ彼は頼政に利用されたに過ぎない、という印象が強い。

しかし、『頼政追善芝』では、高倉の宮を、内侍所を盗み取って皇位を狙い、また、許婚のいる頼政の娘唐国に横恋慕するなど、相当あくの強い人物として設定している。このように、高倉の宮の人物造形を平家物語や先行作とは逆転させた結果、一連の合戦譚を構成する説話の多くを取り込んでいくにもかかわらず、頼政が起こした謀叛はそれまでとは違った意味を与えられることになった。『頼政追善芝』では、頼政が挙兵したのは平家に宮を討たせて国家の安泰を図るためだったわけだが、こうした頼政の真意は四段目になるまで明かされない。しかし、平家物語や先行の浄瑠璃等に親しんだ観客であれば、頼政挙兵の理由がはつきり示されなくとも、頼政の挙兵は平家の横暴へ対抗するためであると理解したのではないか。しかし、四段目奥ノ口に至って観客は、そのような理解は誤りで、実は頼政は身を捨てて国家の安泰を図ろうとした義者であり、頼政の「謀反」は実は謀叛ではなかった、と知ることになる。

高倉の宮の人物造形の逆転に関連して想起されるのが、長谷川千四・文耕堂作の『三浦大助紅梅約』三段目、いわゆる「石切梶原」である。そこでは、平家物語や『義経記』以来、悪役・敵役とされることが多い梶原平三景時を、二つ胴の試し切りに失敗したかのように見せかけて六郎大夫一家の苦境を救う、情味にあふれた人物として描いている。この趣向は、人物像の逆転ということでは『頼政追善芝』と共通すると言える（ただし、『三浦大助紅梅約』の転換は「従来悪人だとされてきた人物が実は善人だった（悪→善）」という浄瑠璃でよく用いられるパターンの踏襲であるのに対し、『頼政追善芝』はさらにその逆をいく「善→悪」という転換であり、独自性には自づから差があるが）。

しかし、『三浦大助紅梅約』では逆転の結果が三段目の一件に留まり、作品のその後の展開、ひいては作品を超えた「歴史の意味」に何ら影響を及ぼすことはなく、「石切梶原」という見た目本位、局面本位の場面を構成するのみで終わってしまう。そこには、歴史の意味を捉え直すといったようなダイナミクスは感じられない。一方、『頼政追善芝』における高倉の宮の人物像の変更に、我々が平家物語で知っている（とと思っていた）高倉の宮の乱の「真実」を一変させる大きな意味を持つ。『三浦大助紅梅約』三段目と比較することで、『頼政追善芝』における高倉の宮の人物像変更が単なる「趣向」に留まらず、「歴史の捉え直し」を意図したものであることが明らかになる。

このように、『頼政追善芝』では、それまであまり描かれることのなかった頼政自害までの部分をふくらませて、平家物語や謡曲『頼政』、直接の先行作である『源三位頼政』とは異なる物語を展開している。高倉の宮という悲運の皇子の人物像をここに、ある合戦譚の意味を、先行作とは違った形で捉え直そうとする姿勢を読み取ることが

できよう。

続いて、享保十三年に竹本座で初演された『加賀国篠原合戦』の検討をおこなう。この作品で中心となるのは篠原合戦譚および木曾義仲関連説話群であり、特に「盛衰記」巻第二十六にある、齋藤別当実盛が二歳の義仲（駒王丸）と母を信濃の木曾中三権頭兼遠のもとに遣わして助命したという説話を全体にわたる下敷きとして、作品を構成している。

さて、実盛と言えど、何といつても髪を黒く染め錦の直垂を着して臨んだ篠原合戦である。若者に侮られまいとする意地、故郷に錦を飾らんとする矜持、そうした老武者の誇りと気概を、この説話は伝えて余すところがない。しかし、『加賀国篠原合戦』で実盛が山吹に白髪を染めさせる理由は、義仲が「親同前」の実盛に容赦したとしても「助けられては武士立たず」、「若武者と見せかけよき敵とひつ組で。快く死ん為」——つまり、武士としての誇りとともに、義仲と実盛との間にある恩義の関係が強調されているのである。

また、平家物語や謡曲『実盛』では、名乗らないまま手塚太郎光盛に討たれた「奇異の曲者」の首を洗うと実盛であると判明する箇所が一つの山場となるが、『加賀国篠原合戦』では、この「首を洗う」という行為自体はさして重きを置かれていない。それよりはむしろ、そこに至るまでの——義仲助命に始まって実盛最期までの一連のできごとを貫く——義仲・兼遠・実盛の間にある交情が大きく扱われている。『加賀国篠原合戦』における実盛の首洗いは、お互いに助け、助けられ、心を通じ合う、そうした三人の交流が行き着いた締めくくりの行為として位置づけられており、その意味でこそ作品において必要かつ重要な場面となる。

平家物語の篠原合戦には、義仲と実盛の間で過去にどのような因縁があるにしろ、「それはそれ、これはこれ」とでも言うべき厳しさがある。「盛衰記」では、実盛の首を見た義仲が「さね盛も義仲が為には七か日のやしない父。あやうき敵の中をはからひ出しける。其心ざしいかかわするべきなれば。此首よく孝養せよとて。さめく」とな。いたとあるが、その場面に至るまで、実盛が義仲の心中を忖度したり、逆に義仲が実盛の動向に注意するというようなことはなく、お互いまったく無関係にことを運んでいく。これは、「盛衰記」の作者が二人の関係を意を用いなかったというわけではなく、彼らは主従関係で結ばれた武士集団に所属しており、ひとたび合戦の場に立てば、個人の心情よりそれぞれが属する武士集団の利益を優先した行動を取るということ、それが源平争乱の時代、武士に対して当然に要求された生き方であったということを示しているのではなからうか。しかし、『加賀国篠原合戦』では、戦乱の中、敵味方に別れた後も義仲・実盛・兼遠はお互いの心中を思い、相手の行動を推し量りながら行動する。このように三人の関係や個人の意思・心情を重視したことで、「実盛最

後」をめぐる説話が、義仲・実盛・兼遠の三人を中心に展開するドラマとして構成し直されたと見えるのだが、しかしながら、それは、武士が生死のぎりぎりの境で虎視眈々と勲功をうかがって生きていた時代の行動とは言い難い。義理や人情という観念が先行し、源平争乱の時代に生きた人々の置かれた状況に対する認識の甘さが感じられるのは、浄瑠璃における種の作劇手法にしばしばあることだが、「加賀国篠原合戦」は特に合戦という極限状況を舞台として設定したがゆえに、そうした傾向が一層顕著にうかがえるように思う。

以上、第二・三節では、浄瑠璃作品における説話受容の具体的様相という観点での分析を試みた。説話が持つすべての側面に焦点を当てることはできず、非常に限られた範囲内での検討となったが、それぞれの作者・作品がどのような形で物語と説話を撰取しているかという特徴の一端は見出しえたかと思う。

四、「仏御前扇軍」

本節では、前節までの検討を踏まえた上で、「仏御前扇軍」(享保七年、竹本座初演、作者文耕堂〔当時は松田和吉を名乗るが、以下、本稿では便宜的に文耕堂と称する〕、近松門左衛門添削)を取り上げてさらに具体的な説話受容の様相を考察する。この作品では、作者と添削者の比重がどのようにになっているのか明確でないが、第二・三節で検討した各の特徴が作中にどの程度表れているかを分析することで、その比重のあり方を幾分でも明らかにすることができるとはならないかと考える。

『仏御前扇軍』は、高倉宮謀反後の平氏の専横ぶりと源平対立の構図を背景に、宮の復讐を誓う長谷部信連の働き、源氏の重宝小鳥をめぐる渋谷土佐二郎正俊・妻延寿(仏御前)と武蔵左衛門有国との親子・夫婦間の葛藤、清盛と妓王・仏御前の三角関係、小督に対する宗盛の横恋慕と高倉天皇の悲嘆など、平家物語に見える雑多な説話を取り合わせている。相互に無関係な説話を、完全に創作的な部分をふくらませることで関連付け、一つの作品にまとめているといった内容で、「説話」という観点から考えるになかなか興味深い作品である(利用されている説話については、表2「文耕堂」のB1を参照されたい)。

まず、この作品を説話的側面から見た特徴を挙げると、次のようになる。

- (一) 多くの説話が組み合わされている
- (二) ほとんどの登場人物は平家物語に名前が見られる(まったくの創作による登場人物がほとんどいない)
- (三) 平家物語全編から前後のつながりのないまま、寄せ集め的に説話を取り込んでいる
- (四) 平家物語の説話をほとんどそのままはめ込む(「妓王」「小督」)

(五) 平家物語に見える説話の前段・後日譚を創作する(「信連合戦」「土佐房被斬」)それぞれについて、以下に説明する。

(一) 組み合わせられる説話の数が多いことについて。第三節で分析したように、文耕堂は素材となる説話をいくつも組み合わせる作品を構成することが多い(表2参照)。作劇を始めて間もない頃の作と思われる「仏御前扇軍」でも、「妓王」「信連合戦」「小督」「土佐房被斬」から素材を取るほか、名剣小鳥を巡るエピソードも加え、さらに景清も登場させるなど盛り沢山で、この時点ですでに近松とはかなり異なる方法で説話を撰取していることが読み取れる。

また、細かいことだが、小鳥のエピソードは「盛衰記」巻第四十および「平治物語」巻中の抜丸の説話を小鳥に移したものである。剣を抜丸ではなく小鳥としたのは、抜丸が頼盛に伝えられたのに対して、小鳥は為義が義朝に伝え、義朝が敗れて後平家の重宝となり(屋代本「剣巻」)、嫡流に伝えられた(流布本巻三)故であろう。こうした伝承経路も「仏御前扇軍」の中では生かされているのだが、説話をそのままただ組み合わせるだけでなく、作品の文脈に沿うように説話に手を加えるなど、作品の文脈にあわせた説話の操作もおこなっていることがわかる。文耕堂の特徴の一つである「構想力」が、この作品の段階ですでに発揮されていると言えよう。

(二) 登場人物について。登場人物について目を向けてみると、この作品の主要登場人物は、長谷部信連、妓王・妓女、渋谷土佐二郎正俊・父渋谷庄司胤俊・妻延寿(仏御前)、武蔵ノ左衛門有国、景清、清盛、重盛、宗盛、瀬尾太郎・難波二郎、小督・高倉天皇・弾正大弼仲国、あたりであろう。その他、名前の見える人物に田原又太郎忠綱、近藤判官経、伊藤武者常弘、越中前司盛俊、上総五郎兵衛忠清、越中次郎兵衛(盛嗣)、船頭斐忠太がいる。このうち流布本「盛衰記」に見出せないのは、渋谷庄司胤俊、伊藤武者常弘、船頭斐忠太のみで、あとは平家物語にも登場し、それなりの役割を果たしている。「三浦大助紅梅豹」以降では登場人物を創作して活躍させるのに比べ、「仏御前扇軍」では説話の受容というにとどまらず、平家物語の世界からはみ出さずに作劇しようとしているように見える。しかし、登場人物についてこれだけ平家物語に忠実な選択をおこなっているにもかかわらず、この作品は、平家物語のどの本系説話・合戦譚とも内容的に重ならず、独自の物語を作り出している点が特徴的である。

(三) 平家物語全編から前後のつながりのないまま説話を取り込んでいる点について。文耕堂が平家物語を素材とする場合、二作目(「三浦大助紅梅豹」)以降は特定の合戦譚から説話がある程度まとめて利用するケースが増えるが、この作品では、比較的独立した説話(「妓王」「小督」など)を利用し、また高倉の宮の謀反からは信連の一件のみ、土佐房正俊についても、金王丸が元服して渋谷土佐二郎正俊と名乗り、さらに出家して土佐房正俊となる部分にのみ焦点を当て、正俊がもつとも活躍するはずの堀

川夜討の一件はまったく取り上げない。換言すれば、これは、彼らにまつわる説話を利用していないということでもある(注(69)参照)。さらに景清に至っては、一連の景清物とは何のつながりもなく唐突に登場した印象が強い。こうした説話の利用の仕方からは、あるまとまった事件なり合戦なりといった「歴史」を新たな視点で読み直そうとする意図は感じられず、興味をそえられるエピソードや登場人物を適当に選び、平家物語の説話にとらわれず自由に動かしていったという印象すら受ける。

(四) 平家物語の説話をほとんどそのままはめ込む手法について。この作品を一読すれば明らかであるが、平家物語の説話を、作品の文脈ごとほとんど手を加えずにそのままはめ込んだかのような部分がある。清盛の寵が仏に移ったために妓王妓女が館を追い出され、その後仏を慰めるため呼び出されて舞を舞う件や、御所から姿をくらました小督を仲国が探しに出かける場面などが該当しよう。また、(一)で触れた小烏・抜丸の説話も、剣の名や事件の起こった状況こそ変更してはいるものの、名剣威徳説話の核となる部分には手を加えずそのままはめ込んである。第二節で近松の説話受容の傾向を検討した際、「説話の骨格や構成にはそれほど手を加えず、説話と物語の文脈を生かす形で利用することが多い」と述べたが、この作品にもそうした傾向が(近松に比して、やり方は拙劣であるが)うかがえる。

(五) 平家物語に見える説話の前後・後日譚を創作する手法について。(四)で「平家物語をそのままはめ込んでいる部分がある」と指摘したが、一方、信連と土佐房に関しては、平家物語や「平治物語」に描かれない部分の物語を創作している。信連については高倉の宮の謀叛後に敵を討つべく清盛を狙っているという後日譚、土佐房については平治の乱で義朝が謀殺されてから出家して土佐房となるまでの部分をふくらませて物語を展開しており、こうした手法はその後の文耕堂の作品にもつながっていると考えられる。

(四)(五)の、両極端とも言える特徴から、『仏御前扇軍』が平家物語の説話を摂取するにあたっては、平家物語における文脈をかなり忠実に取り入れていく近松的な受容のあり方と、説話に書かれない部分をふくらませていく文耕堂的な展開の手法とがとられていることがわかる。

以上に挙げた五つの点から、『仏御前扇軍』は、近松の作風の影響の跡を色濃く残しつつも、近松とは異なる文耕堂独自の作劇法の特徴(多くの説話を組み合わせる、説話に書かれない部分をふくらませて展開する、等)がはっきりとかがえる作品だと言えよう。

最後にこの作品のもっとも大きな特徴についてまとめておこう。(一)(二)の箇所でも若干触れたとおり、『仏御前扇軍』は説話・登場人物ともに平家物語に拠るところが非常に大きい。それにもかかわらず、この作品には「平家物語に描かれた歴史を讀

み直す」という視点は無い。その理由の一つとして挙げられるのは、説話がまとまりではなくぶつ切れて撰取されており、説話の文脈を超えた「物語の文脈」を取り入れることをしていないということであろう。また、平家物語の文脈そのままにめ込んだ説話が二つとも傍系説話であり、もともと物語の文脈からの遊離性が高いということもある。

その上、「小督」説話の受容に際しては、平家物語の説話にあった物語の文脈を削ぎ落とす作業をおこなっていると考えられる。「平家物語」流布本によれば、八月十日過ぎの月夜に仲国が天皇の下に参ったのは、他に「御いらへ申す者もな」かったからだ、それは、娘二人の夫(高倉天皇、冷泉大納言隆房)を小督に取られたという清盛の怒りを恐れた小督が御所から姿を消した後、物思いに沈む天皇に対し、清盛が「さらに取つてはとて、御介錯の女房達をも参らせられず、参内し給ふ人々も猜まれければ」、「入道の権威に憚つて、参り通う臣下もなし」の故であった。つまり、この説話は、天皇を天皇とも思わない清盛の暴虐ぶりを描く説話としても機能していたと言えよう。

しかし『仏御前扇軍』では、大序で清盛に「桜町中なこん重教が娘小督の前。夜のおとへ召し入し昼夜をわかれぬ御寵愛。我が中宮を有なし物にせらる、は。畢竟入道をあなどつての不義放埒。」と言わせておきながら、四段目口で誰も天皇の下に伺候しない理由を「折節月にあこがれて勅答申人もなき」ためだとする。これは明らかに、この説話を清盛暴虐説話の文脈から切り離し、「宗盛の横恋慕によつて小督が御所からいなくなった(だから、この件に関しては清盛は直接関与していない)」という作品の文脈に沿わせるためにおこなった意図的な操作の結果であると考えられる。このように、『仏御前扇軍』では、もともと遊離性の高い傍系説話を選び、さらに物語の文脈を消去する作業をおこなって、説話を物語の文脈から意図的に切り離しているのである。

一方、本系説話から取り入れた説話については、いずれも平家物語が切り落として描かない部分に眼を向けている。要するに、この作品は、主要モチーフ(説話)の選定の仕方や説話の取り入れ方といった作品の方向性を決める基本的な部分で、平家物語における物語の文脈を作品に取り入れることを巧妙に回避したとも考えられるのである。その結果、『仏御前扇軍』は、平家物語の登場人物や説話を大量に撰取したにもかかわらず、平家物語自体の作品世界からは遠く隔たつたところで独自の物語を構築することになった。そもそも、本稿で検討した作品すべての中でも、傍系説話を正面切つて作品の中心のモチーフに据えた作品はこの作以外になく、こうした性格は文耕堂の他の作品にも見られない『仏御前扇軍』独自の方法である。

以上に分析してきたように、文耕堂の源平物一作目である『仏御前扇軍』は、添削者たる近松の影響も受けてはいるものの、素材の選定や全体の構成、物語の展開といった作品の基本構想の面では、文耕堂の特徴と考えられる作劇法が如実に現れていると

言える。この作品では、傍系説話を中心に据えるという思い切った構成を取ったこと
によって、近松の作風や説話受容の手法にとられ過ぎることなく、文耕堂の構成力
を生かして説話をふくらませていく作劇法を取ることが可能になったのではないだろ
うか。

おわりに

ここまで、浄瑠璃が平家物語に取材する際の手法について、平家物語の説話に注目
して分析をおこなってきた。その結果、「平家物語から取材する」と一口に言っても、
作者によって取り上げる説話の種類が異なり、その受容方法にも個性が見られること
がほぼ明らかになったと考える。本稿での考察はごく限られた範囲内のものであるが、
それでも、こうした点にも作者の個性や作風の特徴、彼らが所属していた人形浄瑠璃
座の芸風が表れているということは言えるだろう。

特に、文耕堂と並木宗輔はほぼ同時代に活躍していたにもかかわらず、彼らを取り
上げた説話はあまり重ならない。これは、彼らが浄瑠璃で何を表現しようとした
かにも関わってくる問題であろうが、それとともに、当時の竹豊両座の陣容や芸風に
よって要求される浄瑠璃の内容・質が異なっていたということ、つまり、どの説話に
取材するかということが作品の内容を左右する一つの要因となっていたという当然の
ことがあらためて浮き彫りとなったと考える。

「説話」という視点を浄瑠璃研究に導入することはいかなる意味があるのか、そもそ
も浄瑠璃に「説話」という切り口が馴染むものであるのか、本稿でおこなった分析は、
こうした問題意識を含む課題の一端を論じたに過ぎない。「説話」を広く「世界を認識
するメディア」ととらえるならば、「説話」が浄瑠璃研究で果たす役割は単なる作品論
の範囲にとどまらず、浄瑠璃という世界の認識に、さらに豊かな視野をもたらす可能
性がある。

注(1) 例えば、巻三は原「弁慶物語」を取り込んで成立した可能性が指摘されているなど、
室町時代物語との関係は錯綜している。

(2) 長友千代治「庶民の読書生活」「軍書の読者」「近世貸本屋の研究」東京堂出版、昭
和五十七年

(3) 「参照群書一覧」(日用書房、昭和六年) によるが、旧字体は新字体に改めた。この
他にも一部表記を改めた部分がある。

(4) 「平家物語 十二巻」の解題中には、「林道春ノ曰、(中略) 長門ノ赤間ノ関阿弥陀寺
にて見たりは十六巻あり。」云々とある。

(5) 「参考源平盛衰記 改定史籍集覧本」(臨川書店、昭和五十七年) による。

(6) 清水眞澄「平家物語」の受容 近世(注釈史を含む)「軍記文学研究叢書7 平家
物語 批評と文化史」汲古書院、平成十年

(7) 「大日本地誌大系 第二十一」(雄山閣、昭和三十三年) による。

(8) この「長門本」は、尾崎雅嘉が前掲「群書一覧」で、「此長門本と称するものは、林
氏のいへる赤間ノ関阿弥陀寺の本を伝写するものなるべし」と考証したもの。

(9) 「京都大学国語国文学資料叢書 曼殊院蔵書目録 曼殊院蔵」(臨川書店、昭和五十九
年) の解説(光田和伸執筆)で「ひとまず享保年中にはほぼ現在の形をととのえたも
のと推定しておく」とされているもの。

(10) 清水氏は「平家物語」の受容 近世(注釈史を含む)「(注(6) 前掲) でこの字を
「録」と翻刻しているが、並んで書かれている「源平盛衰記」の「附目錄一策」と比
較しても、「録」とは読みがたいように思われるので、ひとまず「讀んでおく」。

(11) 清水「平家物語」の受容 近世(注釈史を含む)「(注(6) 前掲)

(12) 福田安典「武田科学振興財団杏雨書屋蔵『今大路家書目録』について——お伽の医
師の蔵書——」『芸能史研究』一二九(平成七年四月)に紹介。引用はこの翻刻によっ
たが、旧字体は新字体に改めた。

(13) ちなみに、「武田科学振興財団杏雨書屋蔵『今大路家書目録』について——お伽の医
師の蔵書——」(注(12) 前掲) では、近松門左衛門の母方の岡本家、近松弟の岡本
一抱もこの学統に属していることを指摘した上で、「一抱は母方の誼みを通じて、今
大路家の書籍を閲覧したことがあったのであろうか。また、近松は如何であったのか」
という問題意識を提示しており、興味深い。

(14) 早稲田大学図書館所蔵。「日本書誌学大系二十七 大徳蔵書目録と研究」(青裳堂書
店、昭和五十八年) の翻刻を参照した。括弧内は引用者注。

(15) 長友「近世貸本屋の研究」(注(2) 前掲)

(16) 本稿では、特に次の文献を参考にさせていただいた。栃木孝惟「平家物語と説話」『諸
説一覽 平家物語』明治書院、昭和四十五年。小峯和明「軍記文学と説話」『軍記文
学叢書1 軍記文学とその周縁』汲古書院、平成十二年。

(17) 特に以下の文献を参考にさせていただいた。坂口玄章「平家物語の説話的考察」昭

森社、昭和十八年。佐々木八郎『平家物語の達成』明治書院、昭和四十九年。松尾華江「覚一本平家物語における方法としての説話——平家物語の時間・その三——」『平家物語論究』明治書院、昭和六十年。

(18) 析木「平家物語と説話」(注(16)前掲)

(19) 検討の対象としたのは『近松全集』(岩波書店刊)第一・十三巻に収録された作品のうち、平家物語中の説話が作品の中心となっていると考えられるもの。初演年月・劇場は「義太夫年表 近世篇」・「近松全集」解題に拠る。

(20) 除外理由と外題は次のとおりである(いくつか除外理由がある作品の場合、重複している)。

・「保元物語」に拠る 『鎌田兵衛名所盛』

・「平治物語」に拠る 『烏帽子折』『鎌田兵衛名所盛』(『烏帽子折』は舞曲『烏帽子折』に拠るか)

・「浄瑠璃十二段草子」に拠る 『十二段』『源氏れいぜいぶし』

・「義経記」に拠る 『吉野忠信』『源義経将基経』

・「曾我物語」に拠る 『源氏れいぜいぶし』

・その他 『傾城島原蛙合戦』(世界を源平合戦に取り、島原の乱を扱う)

(21) 『薩摩守忠度』と『千載集』との関係はどちらが先行するものか断定しがたい。『近松全集』第一巻『千載集』解題参照。

(22) 信多純一「津戸三郎」と『門出八島』『近松の世界』平凡社、平成三年(初出は『近松の研究と資料 第一集』昭和三十四年)

(23) 内山美樹子「谷嫩軍記」ノート(『演劇学』三十六、平成七年)補遺(二)、参照。

(24) 信多純一「山本角太夫について」『古浄瑠璃集』角太夫正本(二)『古典文庫』昭和三十六年

(25) 本稿における本系・傍系の分類に関しては、主に松尾華江氏が覚一本に対しておこなった分類を参考にした。注(17)参照。

(26) ⑧は合戦譚と見ることができ、作中では忠度都落のエピソードと組み合わせられており、歌人忠度の風雅さを示す人物説話としても認識されていたと見たい。

(27) 「妓王」「小督」など、清盛の横暴により無力な女性が哀れな境遇に立たされるような説話を、仮にこう名づけておく。

(28) 佐谷眞木人「浄瑠璃における敦盛像」(『平家物語から浄瑠璃へ——敦盛説話の変容』慶應義塾大学出版会、平成十四年)参照。その他、『近松全集』第一巻(藤井乙男編、朝日新聞社、大正十四年)の『念仏往生記』解題では、第三の法論を仏書『大原問答』に拠るとする。

(29) その意味からすれば、能・舞曲・古浄瑠璃において敦盛の側から読まれることの多かったこの説話を、『大原問答』を経てもう一度熊谷の側のドラマとして取り戻した

のが、並木宗輔の「二谷嫩軍記」だと言うこともできるだろう。

(30) 内山美樹子「日本演劇における時間 夢幻能と浄瑠璃を中心に」『日本の美学』十九(平成四年十二月)

(31) 『日本古典文学大系 謡曲集 上』(岩波書店、昭和三十五年)「盛久」解題

(32) ①は平家物語とまったく異なる文脈で用いられているが、これはメインモチーフではなく、単に静に結びつけられるような登場人物を平家物語中から借りてきただけと考えるべきかもしれない。

(33) 正本署名による。正本署名と立作者との関連については、横山正「四段目の趣向とその作者——文耕堂関係の合作浄瑠璃——」(『大阪学芸大学紀要 A、人文科学』一、昭和二十八年三月)、同「文耕堂浄瑠璃の趣向——その二段目切について——」(『大阪学芸大学紀要 A、人文科学』三、昭和三十年三月)、同「享保・元文・寛保期の浄瑠璃」(『浄瑠璃操芝居の研究』風間書房、昭和三十八年)における考察を参照。

(34) 内山「菅原伝授手習鑑」などの合作者問題『浄瑠璃史の十八世紀』(勉誠出版、平成元年)所収

(35) 特に、『鬼一法眼三略巻』は、「義経記」の他、(直接の書承関係ではないにしろ)室町時代物語に見られるような義経伝説から影響を受けている部分もあり(鬼一法眼の娘の名を皆鶴としたり、鬼一の住まいを一条今出川と設定するなど)、「義経記」に拠らない義経伝説にも目配りする必要がある。

(36) 巻数・段名は基本的に流布本によるが、「盛衰記」のみに見える説話、明らかに流布本より「盛衰記」に拠っていると見なし得る説話に関しては、「盛衰記」の巻数を記した。

(37) 『御所桜堀川夜討』『清和源氏十五段』は、「土佐房被斬」以外の素材の面から見れば「義経記」等の義経伝承に拠る部分が多い。『世界綱目』では、『御所桜堀川夜討』を義経記の世界に分類している。『清和源氏十五段』の名は『世界綱目』にはないが、題名からしても義経記の世界に分類されよう。

(38) 内訳は次のとおりである(一)でくくったものは、群として扱えるもの)。

文耕堂 本系⑥⑦⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲
⑬⑭⑮、その他㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲

宗輔 本系⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬、合戦譚④⑤⑨⑩、傍系①(②③)

その他の作者 本系⑩、合戦譚①③④⑤⑧⑨⑪⑬、傍系②⑤⑥⑦⑫⑬、その他⑭

(39) 独立を企てた時期は「義太夫年表 近世篇」の説に従う。

(40) 例えば、『仏御前扇車』では、「嵯峨の奥の庵」という一点から妓王妓女と小督を結びつけている(「妓王二十一にて尼になり、嵯峨の奥なる山里に、柴の庵をひきまむすび」「小督は、嵯峨の邊、片織戸とかやしたる内に有り申す者の有るぞとよ」。ただし、この二説話には、この他に「清盛悪逆・女人哀話型説話」という共通点もある。

(41) 横山、注(33)前掲論文、近石泰秋「文耕堂について」(『操り浄瑠璃の研究』風間

書房、昭和三十六年）等。

- (42) 黒石陽子「御所桜堀川夜討」考『東京学芸大学紀要 第2部門』四十七（平成八年）
ただし、個別の作品には「隠された歴史の真実」を語ろうとする態度が見られるものもある。例えば、『御所桜堀川夜討』の土佐房正俊の人物造型の変更に（最終的には地口に収斂してしまうものの）「歴史を捉え直す」という視点が働いているように思われる。また、『ひらかな盛衰記』における木曾義仲像については、黒石陽子「ひらかな盛衰記」序切の意義——木曾義仲の解釈をめぐる——（『歌舞伎 研究と批評』三、平成元年七月）、同「時代浄瑠璃における歴史解釈——木曾義仲の造形をめぐる——」（『国語と国文学』六十八（九）、平成三年九月）参照。
- (44) 内山美樹子「並木宗輔」（『岩波講座歌舞伎・文楽 第九巻 黄金時代の浄瑠璃とその後』岩波書店、平成十年）附載の「並木宗輔（千柳）作品一覧」を参照。
- (45) 内山美樹子「浄瑠璃史の十八世紀」（注（34）前掲書、所収）
- (46) 内山美樹子「享保の改革と人形浄瑠璃」（注（34）前掲書、所収）
- (47) 近石「操り浄瑠璃の研究」（注（41）前掲）。内山「浄瑠璃史の十八世紀」（注（46）前掲）
- (48) この他、『清和源氏十五段』では静・卿の君が登場するが、これは「義経記」に拠ると思われる。なお、宗輔が平家物語からとりあげた女性のうち、千寿の前は恩と忠義のためにみずからの意思決定で子どもを犠牲にする（『石橋山鏡襲』）。『待賢門夜軍』のあやめの件（帝の邪恋）は古浄瑠璃『麗女袖鑑』の焼き直して、独自の趣向に拠るものではない（内山美樹子氏のご教示による）。このように、この二人は平家物語に出てくる名前を用いているが、平家物語に描かれる姿と直接はつながらない。
- (49) 永井路子「平家物語の女性たち」文春文庫、昭和四十六年
- (50) 注（47）に同じ。
- (51) 田中貴子「平家物語の女たち」『アエラムック 平家物語』がわかる。朝日新聞社、平成九年
- (52) 石母田正「平家物語」岩波新書、昭和三十二年
- (53) 鈴木淳一「平家物語の女人像——二代后・建礼門院・祇王を中心に——」『語学文学』十三（昭和五十年）
- (54) 北川忠彦「平家物語の（仏） 女人往生談の典型」『国文学 解釈と教材の研究』二十七（十三）（昭和五十七年九月臨時増刊「古典の中の女・○○人」）。同書において、平家物語の女性は仏の他に二代后・千手・横笛が取り上げられているが、同様の指摘が（千手）（横笛）の項にも見られる。
- (55) 付言すれば、こうした女性の姿は『奥州秀衡有誓塚』の妻沖の井に非常に顕著な形で読み取れる。
- (56) 『大仏殿万代石礎』は景清物、『伊勢平氏年々鑑』は平家物語に見えるエピソードも交えてはいるが、全体としては「平治物語」に拠るところが大きい。『太政入道兵庫岬』

は巻六「経島」にも関連するが、むしろ「摂陽群談」巻五・九・十等に見える伝説や舞曲「築島」、その他浄瑠璃の先行作などを受けていると考えた方が妥当であろう。

- (57) 例えば、『平家物語』によれば、王位を狙う以仁王の野望と、源頼政の私怨により生じた事件であるとして、批判的に記される。（『早川厚一「平家物語合戦地図」『アエラムック 平家物語』がわかる。』（注（52）前掲））

(58) 流布本の「実盛最後」は、実盛が義仲を兼遠に預けた説話にまったく触れない（そもそも巻六「廻文」の時点で、実盛が義仲を兼遠に預けたという説話を記さない）。一方「盛衰記」では、首洗いの後で義仲がこのことに触れ「あやうき敵の中をはからひ出しける。其心ざし。いかでかわるべきなれば。此首よく孝養せよ」と言って泣いたことを述べており、敵味方にかかわりなく武士の間に存在する恩義が描かれている。こうした点からすれば、『加賀国篠原合戦』は基本的な部分で「盛衰記」に拠っていると見なしてよからう。

- (59) 局面は異なるが、梶原正昭「頼政拳兵」（武蔵野書房、平成十年）に、合戦での武士と僧兵の行動を比較し、戦闘集団としての武士の戦い方について触れた部分がある。

(60) 特に東国武士について、山本幸司「合戦における文化対立」（『朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす 8 武士とは何だろうか』朝日新聞社、平成六年）参照。

- (61) ただし、「盛衰記」の「から皮小がらすぬけ丸の事」は、小鳥は桓武天皇の代から内裏に伝わっていたものを貞盛に下しおかれて以来平家の重宝となったとする異説を伝えており、『仏御前扇軍』の典拠の一つとするにはやや問題が残る。とは言え、小鳥と抜丸に関する説話を列挙するのは、管見の限りでは「盛衰記」のこの部分のみであり、『仏御前扇軍』にまったく影響を与えていないとは考えにくい。

(62) この他、「盛衰記」巻第四十「から皮小がらすぬけ丸の事」は、抜丸の前名が「木枯」であったというエピソードを伝えている。「こがらす」と「こがらし」の音の類似も、この二つの名剣にまつわる説話の移動を容易にしたのではないかと。

- (63) 小鳥については、内山美樹子氏からご示教いただいた謡曲「髭切」（『未刊謡曲集 二』に収録。『同 統十二』の解題によれば、近世初期頃作の可能性が高い）との関連も看過できない。この作品は「平治物語」（流布本）巻下「頼朝義兵を挙げらるる事並びに平家退治の事」を基に構想された作品である。「髭切」という題名ではあるものの、最後は平家重代の名剣小鳥を寿ぐ内容になっており、「平治物語」の該当部分には出てこない宗盛・重盛も登場するなど、『仏御前扇軍』との関連性は「平治物語」そのものより高いと考えられる。この点についてはなお検討すべきであると思うが、いま詳らかにし得ない。

(64) 大序、「高倉の院と申せしは」とあるが、ここではまだ天皇のはずである。

(65) 覚一本系「盛衰記」は少弐、延慶本は藏人、流布本は大弐とする。

(66) 加賀国目代で、巻一「鶴川合戦」においていわゆる白山騒動の基となった人物。「加賀国の者」（流布本）仏に対し、加賀に縁のある人物を配しているわけで、かなり意

図的に登場人物の選定をおこなっていることがわかる。

- (67) ただ、景清は『義経記』巻第一「常盤都落の事」で清盛から常盤を預けられるなど、清盛から非常に信頼されていたように描かれる場合があり、ここでもそうしたイメージが働いている可能性はある。とすれば、それほど唐突な登場というわけでもないと言える。

- (68) 舞曲『堀川夜討』には、土佐正尊について「此者十九の年、未だ金王丸と有し時」とある。「平家物語」奥村本十二「土佐坊が夜討」でも、土佐坊正俊と金王丸を同一人物とするが、流布本・「盛衰記」といった当時一般に目にすることの多かった諸本の説話レベルでは、金王丸＝土佐坊ということは出てこない。

- (69) この点について、浄瑠璃というジャンルの文体や音曲表現の制約のためではないかということも考えられるが、それだけでは、伺候する者がいない理由として「折節月にあこがれて」という平家物語にない一文をわざわざ挿入した意図が明確でない。

- (70) しかし、この文章にまったく近松の手が入っていないかということは別に検討を要するだろう。『酒呑童子枕言葉』初段にも、ここによく似た局面があるが、表現に似通った印象を受ける。

- (71) 景清説話も傍系と言えは言えるが、景清説話（伝承）群は景清物として一つの作品群を形成しており、他の傍系説話とは同列に論じられない。